広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第55号　2006　173－182

九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Christão の受容史についての地理言語学的研究

小　川　俊　輔

（2006年10月５日受理）

A Geolinguistic Study on the History of Acceptance of "Christão" in the Kyushu District of Japan

Shunsuke Ogawa

This paper describes the history of reception and conflict concerning the words "Christão" and "Christian" in the Kyushu district of Japan.

In conclusion, the following results were determined ; [kiriʃitaɴ] derived from Christão (Portuguese) came to be used after the 16th century in Kyushu district of Japan. Since the Japanese government forbade and repressed Christianity from 1587 to 1873, [kiriʃitaɴ] came to be used as a discriminatory way of speaking. In the Nagasaki area, many discriminatory terms ([gedo:], [a:meɴ], etc.) were made in conscious discrimination against Christianity, and were used along with [kiriʃitaɴ]. Now, discriminatory attitudes are fading and so too the discriminatory use of [kiriʃitaɴ], [gedo:] and [a:meɴ] is gradually disappearing. On the other hand, [kurisutʃaɴ] derived from Christian (English) after the middle of the 19th century, without a discriminatory meaning, has come to be used throughout most of the Kyushu district.

This paper is the first trial of interpretational research on a linguistic atlas of Japan, showing that usage of dialect was influenced by a sense of religious discrimination.

Key words: Geolinguistics, history of acceptance, Christian vocabulary, Christão, Kyushu district
キーワード：地理言語学，受容史，キリシタン語彙，キリシタン，九州地方

Ⅰ．はじめに

１．本稿の目的と方法

本稿の目的は，九州地方域方言におけるキリシタン語彙[*1]Christão（キリスト教信者）の受容史を考察することである。九州地方全域 300 地点において方言実地調査を行い[*2]，得られた資料から方言事象分布地図を描き，方言事象の分布を解釈することによって受容史を考察するという方法を用いる。

２．先行研究と本稿との関係

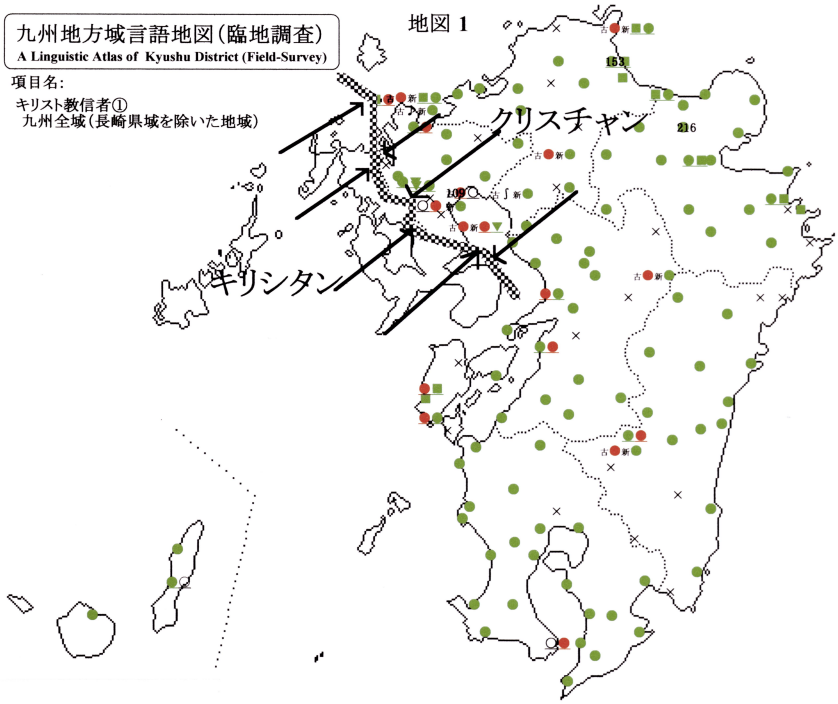
日本における言語地図解釈研究では，主に基礎語や日常生活語が研究の対象にされてきた（国立国語研究所（1966-1974），柴田（1969），藤原（1976）など）。しかし，本稿で取り扱うような項目が研究の対象にされることはほとんどなかった。また，本稿で考察を行う宗教と方言事象分布との関係についても，これまでに十分な研究がなされたとは言えない状況にある[*3]。そのような研究状況下にあって，筆者は，宗教，特にキリスト教と方言事象分布との関係について一連の研究を行ってきた（Ogawa（2006.4），小川（2006.5）など）。本稿では，被調査者のキリスト教・キリスト教徒に対する意識を方言事象分布の歴史的解釈を行う際に利用する。この点に，従来の言語地図解釈研究にはみられなかった，本稿の方法論的独自性がある。

他方，文献国語史の分野では，キリシタン語彙を扱った多くの先行研究がある（土井（1933），楳垣（1943）など）。しかし，九州地方全域における方言実地調査にもとづいて，具体的にどの地域でどのようにキリシタン語彙が受容されたのかを考察した研究は見られなかった。これを試みることも，本稿の独自性である。

３．質問文

キリスト教の信者さんのことをどう呼びますか？
［kiriʃitaɴ］［kurisutʃaɴ］［katorikku］と言いませんか？

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。江端義夫（主任指導教員），佐々木勇，竹村信治，沼本克明，町博光



【地図１～３の凡例】

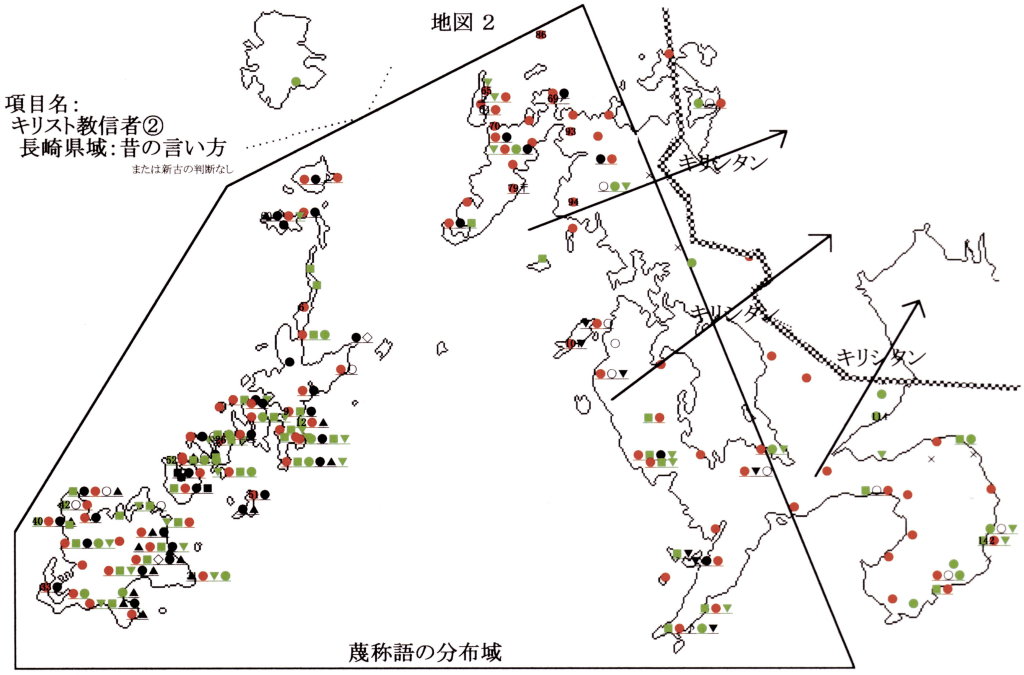
● : [kiriʃitaɴ] 類 ([kiriʃitaɴ] [kirisutaɴ] [kiriʃitʃaɴ] [kiriʃitandoɴ] [kiriʃitammoɴ] [kiriʃitanrenɡtʃu:]

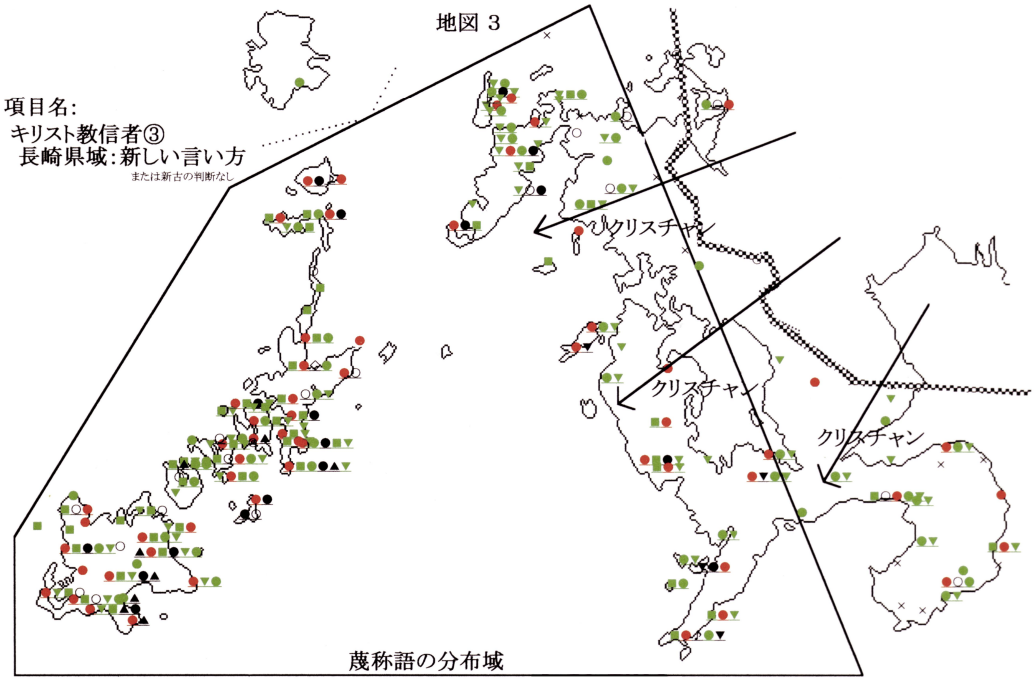
● : [a:meɴ] 類 ([a:meɴ] [a:meɴ a:meɴ] [ameɴsomeɴ] [a:meɴsaɴ] [a:meɴso:meɴ hijazo:meɴ]
▲ : [gedo:] 類 ([gedo] [gedo:] [gedogedo] [gedopappa] [gedobatereɴ]
■ : [bosa] 類 ([bosa] [bosakure])
▼ : [kuroʃu:] 類 ([kuroʃu:] [kuroʃu] [kurosu:]

● : [kurisutʃaɴ] 類 ([kurisutʃaɴ] [kurusutʃaɴ] [kurisutaɴ]
▼ : [katorikku] 類 ([katorikku] [katorikku ʃin ʨ a]
■ : [ʃin ʨ a] 類 ([ʃin ʨ a] [ʃin ʨ asaɴ] [ʃin ʨ anohito] [ʃin ʨ aɴhito] [ʃin ʨ amoɴ] [ʃin ʨ adoɴ] [ʃin ʨ arentʃu:])

♪ : [jaso] 類 ([jaso] [jasoʃu:])
◇ : [bateretɴ] 類 ([bateretɴ] [bateretɴsaɴ])
@ : [ʨ uʃitaɴ]
○ : [kirisuto] 類 ([kirisuto] [kirisutosaɴ] [kirisutokjo:] [kirisutokjo:to] [kirisutokjo:saɴ] [kirisutokjo:nokata] [kirisutokjo:ʃin ʨ a])
〒 : [hurukiriʃitaɴ]
♭ : [ʃiŋkjo:]
〆 : [kattakkiriʃitaɴ] 類 ([kattakkiriʃitaɴ] [kattjakiriʃitaɴ])
∫ : [raʃakjo:to]

× : 分からない。知らない。


地図 2
項目名:
キリスト教信者②
長崎県域:昔の言い方
または新古の判断なし
キリシタン
キリシタン
キリシタン
蔑称語の分布域


地図 3
項目名:
キリスト教信者③
長崎県域:新しい言い方
または新古の判断なし
クリスチャン
クリスチャン
クリスチャン
蔑称語の分布域

Ⅱ．方言事象分布の概観[4]

地図 1 上には，長崎県域を除く地域での回答事象を符号化し，押印している。被調査者から併存事象に対する新古の判断があった場合には，「新」「古」の字を各事象に付した。

地図 2 上には，長崎県域における回答事象のうち，被調査者が「古い言い方」「昔の言い方」と説明した事象，または新古の判断がなかった事象を符号化し，押印している。

地図 3 上には，長崎県域における回答事象のうち，被調査者が「新しい言い方」と説明した事象，または新古の判断がなかった事象を符号化し，押印している。

１．［kiriʃitaɲ］類の分布とその変遷

［kiriʃitaɲ］類は，かつて長崎県域に濃密に分布していた（地図 2）。その後，分布領域が狭くなり，分布密度も大きく下がっている（地図 3）。長崎県を除く地域では，長崎県に近い熊本県・佐賀県に分布しており（両県各 5 地点），長崎県から遠くなるにつれて分布地点数が少なくなっている（福岡県 2 地点，大分県 0 地点，宮崎県 2 地点，鹿児島県 1 地点。地図 1）。［kiriʃitaɲ］類は九州全域において，多くの地点で「古い事象」として被調査者に認識され，次第に使用されなくなってきている（地図 1,2,3）。

２．［kurisutʃaɲ］類の分布とその変遷

［kurisutʃaɲ］類は，長崎県域を除く地域では古くから使用されてきた（地図 1）。他方，長崎県域では，島原半島や五島列島などの狭い地域でのみ使用されていた（地図 2）。しかし，その後，長崎県全域で広く使用されるようになった（地図 3）。現在，九州地方において，共通語的事象として最も多く使用されている。

３．［katorikku］類の分布とその変遷

［katorikku］類は，長崎県域及び佐賀県の長崎県よりの地域のみに分布する事象である（地図 1,2,3）。長崎県域でも，古くから広域に分布していた事象ではなく（地図 2），新しく分布領域が拡大した事象である（地図 3）。

４．［ʃin ɕ a］類の分布とその変遷

［ʃin ɕ a］類は，長崎県域を除く地域では，佐賀県の離島に 2 地点，熊本県天草地方に 2 地点，福岡県に 3 地点，大分県に 4 地点分布している（地図 1）。長崎県域では，かつて五島列島及び長崎県本土南部地域（島原半島・西彼杵半島南部・野母半島）に分布していたが（地図 2），その後，分布領域が拡大した（地図 3）。

５．蔑称語の分布とその変遷及び語源について

被調査者が「差別的な言い方，見下げた言い方」などと説明した事象を蔑称語と定義した。蔑称語としたのは，［a:meɲ］類，［gedo:］類，［bosa］類，［kuroʃu:］類である。蔑称語が分布するのは，長崎県本土の西部沿岸地域及び離島地域のみで，その他の地域には分布していない（地図 1,2,3）。また，どの蔑称語も，各地で古い言い方として認識され（地図 2），その分布領域は狭くなり，使用が減ってきている（地図 2,3）。

５．１．［a:meɲ］類について

［a:meɲ］類は，蔑称語の中では最も分布領域が広く，長崎県本土の西部沿岸地域及び離島地域に分布している。この地域において，かつては広く使用されていたが（地図 2），その後，使用されなくなってきた（地図 3）。

［a:meɲ］類の語源は，カトリックにおける祈りのことば「アーメン」であると考えられる。

５．２．［gedo:］類について

［gedo:］類は，長崎県の下五島地域に集中的に分布している（地図 2,3）。［a:meɲ］類と同様に，次第に使用されなくなってきている（地図 2,3）。

［gedo:］類の語源は，仏教語である「外道」であると考えられる。その原義は，『日本国語大辞典』（2000-2002）によれば，「仏教者が仏教以外の教えをいう語。また仏教以外の宗教を信奉する者」である。キリスト教の信者をさして，仏教語が語源であると考えられる蔑称語が存在することは注目される。

５．３．［bosa］類について

［bosa］類は，下五島地域の久賀島にのみ分布している（地図 2）。かつては 3 地点に分布していたが（地図 2），その後使用が減り，分布地図上から消えた事象である（地図 3）。

［bosa］の語源として，まず，猛者（モサ）が考えられる。『日本国語大辞典』（2000-2002）によれば，18 世紀初頭の雑俳に，「関東の人をあざけって言う語」として［bosa］の用例があるという。また［bosa］は，いなか者，やぼな人をあざけっていう言い方として使用された，と記されている。別の語源として，雑草などの茂み，やぶを意味するぼさが考えられる。「だらしないこと，役に立たないこと。また，その人」の意

で［bosa］が島根県那賀郡・邑智郡において使用されている，と同上書に記されている。さらに，筆者による方言実地調査の際に，「カトリックの人は，昔は生活が苦しくて，服も汚れたボサボサのものを着ていたからボサといった」との説明を受けた。以上のように様々な語源が考えられるけれども，決め手がない。

５．４．［kuroʃu:］類について

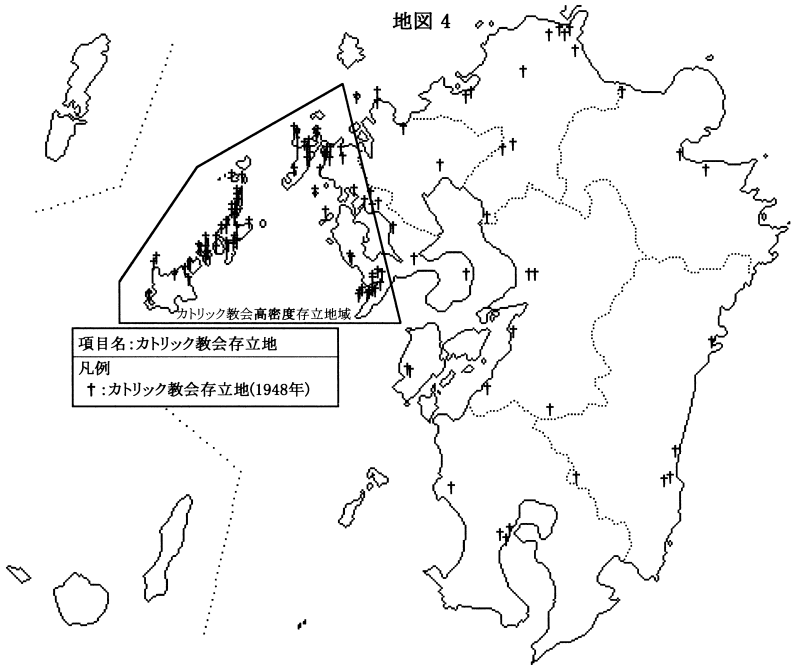
［kuroʃu:］類は，長崎県本土の西彼杵半島，野母半島にのみ分布している（地図 1,2,3）。他の全ての蔑称語と同様に，分布地点数は少なくなってきている（地図 2,3）。

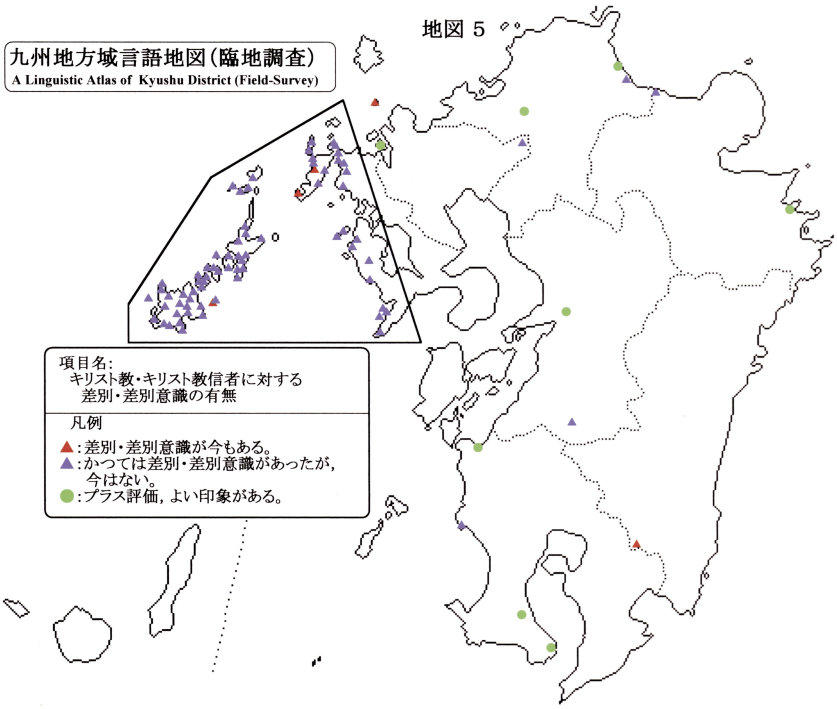
［kuroʃu:］類の語源もいくつか考えられる。まず，十字架を意味する cross に衆/宗のついた cross 衆/宗から，との説が考えられる。また，カトリック神父などが儀式の際に黒い装束を身に付けることから，との説も考えられる。さらに容疑者に犯罪の事実があることを言う［kuro］からでた，とする説もある（米村（1998））。筆者による方言実地調査の際には，「この地域には，黒崎，黒島など黒のつく地名にキリスト教がたくさんあるから」との説明を受けた。以上のように，いくつかの語源が考えられるけれども，決め手がない。

Ⅲ．方言事象の分布域と重なる分布域を持つ言語外情報について

ここでは，方言事象の分布域と重なる分布域を持つ言語外情報について述べる。具体的には① 1948 年当時のカトリック教会の分布，②キリスト教・キリスト教徒に対する差別・差別意識の有無，である。①を分布地図化したものが地図 4，②を分布地図化したものが地図 5 である。

地図 4





１．1948 年当時のカトリック教会の分布域と重なる蔑称語の分布域

1948 年当時，長崎県域は他の九州地域に比して圧倒的に多くのカトリック教会が分布していた（地図 4）。長崎県域の中でも，特に，五島列島，平戸・北松浦地方，西彼杵半島南部から野母半島に多くのカトリック教会が分布していた（地図 4）。この分布域と重なるのが，蔑称語の分布域である。つまり，蔑称語の回答された地域は，カトリック教会の存立密度が高い地域なのである。中でも［a:meɲ］類の分布域は 1948 年当時のカトリック教会の分布密度が高い地域と非常によく重なっている（地図 2,4）。

２．キリスト教・キリスト教徒に対する差別・差別意識があったと回答された地域と重なる蔑称語の分布域

「キリスト教・キリスト教徒に対する差別・差別意識があった」との回答は，長崎県域の中でも特に，五島列島，平戸・北松浦地方，西彼杵半島南部から野母半島に分布している（地図 5）。他方，長崎県域の中でも，佐賀県との接境地域や島原半島には分布していない。

この「差別・差別意識が存在した」と回答された地域は，カトリック教会の分布密度が高い地域と重なっている（地図 4,5）。すなわち，差別・差別意識の存在した地域と蔑称語類の分布域及び 1948 年当時のカトリック教会の分布密度が高い地域は重なっている（地図 2,3,5）。

Ⅳ．方言事象分布の歴史的解釈

以下では，被調査者の併存事象に対する新古の判断，被調査者のコメント，Ⅲに記した方言事象分布と言語外情報との関係などから，方言事象分布について歴史的解釈を試みる。

1．最古の事象［kiriʃitaɴ］類と新来の事象［kurisutʃaɴ］類との接触史

最古の事象は，ポルトガル語 Christão が語源で，中世末期以来の事象であると見られる［kiriʃitaɴ］類であろう。中世末期のキリシタン資料には，次のような用例がある。

然れば，後生の為に専なる事をキリシタンに教へん為にコンパニヤの司より此の小さき経に具へ給ふものなり。　（1592 年『ドチリイナキリシタン』[*5]）

上記文献の他，中世末期から近世初期にかけて出版された多くのキリシタン資料に［kiriʃitaɴ］の用例がある。このことから，［kiriʃitaɴ］類は中世末期以降に使用された事象であることが確かめられる。

［kiriʃitaɴ］類は，かつて長崎県全域に広く分布し，接境する佐賀県西部地域にも分布領域を広げようとしていた（地図 2）。しかし，やがて［kiriʃitaɴ］類は古い事象として認識されるに至り，九州全域に分布する共通語的な［kurisutʃaɴ］類などに押され，しだいにその分布領域を狭めてきている（地図 1,2,3）。特に長崎県北部地域において，［kiriʃitaɴ］類は［kurisutʃaɴ］類にとって変わられ，長崎県のその他の地域においても，一様に［kiriʃitaɴ］類から［kurisutʃaɴ］類への移行が起きている。これは，中世以来の南蛮文明を背景とした事象［kiriʃitaɴ］から，明治以降の欧米（特に英米）文化を背景とした事象［kurisutʃaɴ］（英語 Christian が語源と考えられる[*6]）への移行が起きている，と言い換えることができる。これは，日本史における 16 世紀以降の西洋文明との接触史を反映しているものと解釈される。

2．差別的意味をともなった事象［kiriʃitaɴ］の衰退

以下に，「［kiriʃitaɴ］類は差別的な言い方である」とする被調査者の説明を記す。（被調査者の後に記している数字は地点番号を示す。地図 1，2 参照。）

被調査者 6「「キリシタン」というと嫌ったように聞こえるので今は言わない。」

被調査者 9「「キリシタン」は蔑視した言い方。」

被調査者 12「「キリシタン」「シンジャ」「アーメンアーメン」と差別的に言う。」

被調査者 26「「キリシタン」とは本人の前では言わない捨てことば。」

被調査者 33「昔も今も「キリシタン」というが，本人の前では言わない。」

被調査者 40「子供の頃，喧嘩の時には「コノキリシタンガ！」と言っていた。」

被調査者 42「「キリシタン」はけなした言い方。」

被調査者 51「昔は「キリシタン」と言っていた。悪いことばとしてあまり言わなかった。」

被調査者 52「下品な昔ことばが「キリシタン」。」

被調査者 60「「キリシタン」は軽蔑した言い方。」

被調査者 64「昔は「キリスト」「キリスタン」と言った。今は「カトリック」「クリスチャン」。今は「キリシタン」と言うとけなしているように聞こえるので言わない。」

被調査者 65「家で掃除をしない子には，「キリスタンノゴトシテカラ」などと言っていた。」

被調査者 69「昔は「キリシタン」と言った。よくないことば。意地悪なことば。」

被調査者 70「昔は「キリシタン」と言った。馬鹿にした言い方。」

被調査者 79「昔は「キリシタン」と言った。男の子が喧嘩する時には意味も分からず「キリシタンノタンコロガンガ」「フルキリシタンガ」とカトリックの人に向かって言っていた。」

被調査者 86「昔は「キリスタン」と言った。また，不潔な人，道理にはずれた人をさして「キリスタン」と言っていた。」

被調査者 93「昔は「キリスタン」と言った。差別した言い方だった。」

被調査者 94「昔は「キリシタン」と言ったようだ。カクレキリシタンのイメージで「キリシタン」を用いる。下に見るような感じ，軽蔑したように聞こえる。」

被調査者 107「昔は「キリシタン」と言った。低く見る気持ちがあった。最近は言わない。」

被調査者 114「「キリシタン」と言えば異端者のような響きで使わなかった。」

被調査者 142「「キリシタン」は露骨に聞こえるので言わない。」

被調査者 216「「キリシタン」は歴史上のことば。悪いことばというイメージがある。」

被調査者による上記のような説明は，長崎県域において集中的に聞かれ（21 地点），他の地域では 2 地点でしか聞かれなかった。

このことから，長崎県域には，［kiriʃitaɴ］類は差別的な事象である，との社会的意識・集団意識が存していたことが分かる。この社会的意識・集団意識とキリスト教・キリスト教信者に対する差別意識（地図 5）は，両者の分布域が重なることから，密接な関係があるものと解釈される。このことから，［kiriʃitaɴ］類はキリスト教・キリスト教徒に対する差別意識を背景として使用され，差別意識の薄れ（地図 5）と並行して

使用されなくなっていったものと解釈される。これは，禁教政策[7]・宗教対立→迫害・差別意識の発生・拡大→差別意識の薄れ，という歴史的事実を反映した方言事象史であると言える。

３．キリスト教徒を差別する蔑称語の衰退

長崎県本土の西部沿岸地域及び離島地域にはキリスト教・キリスト教徒差別意識が存在した（地図 5）。この地域では，3 地点の被調査者から「差別・差別意識が今もある」との説明を受けた。また，62 地点の被調査者から，「かつては差別・差別意識があったが今はない」との説明を受けた（地図 5）。この意識が存在した地域に，［gedo:］類，［bosa］類，［kuroʃu:］類，［a:meɴ］類などの蔑称語が分布していた（地図 2）（その後，分布地点数は減少した（地図 3））。また，この地域は 1948 年当時のカトリック教会の分布密度が高い地域とも重なっている（地図 4）。これらの事実とカクレキリシタン関係の先行研究による成果から，蔑称語の事象史は次のように解釈される。

明治初期，長崎県本土の西部沿岸地域及び離島地域において，多くの潜伏キリシタン・カクレキリシタン達がカトリック教会へ戻り，信者となって各地に教会を建立していった（姉崎（1925），浦川（1927-1928）などによる。また地図 4 はこの事実の傍証となっている）。このことによって，近世期には密かにカトリック信仰を続けていた人々は，周囲の人々にカトリック信者であるとはっきり認識され，差別された。同地域におけるキリスト教徒に対する差別意識から使用されたのが，［gedo:］類，［bosa］類，［kuroʃu:］類，［a:meɴ］類などの蔑称語である[8]。

しかし，現在ではキリスト教徒に対する差別意識は薄れ[9]（地図 5），それにともなって蔑称語も使用されなくなりつつある（地図 2 では 50 地点に蔑称語が分布していたのに対して，地図 3 では半数以下の 24 地点にしか分布していない）。

一方で，この差別意識は，現在でも完全になくなってはいない（地図 5）。蔑称語が現在でも 24 地点に分布している（地図 3）理由の 1 つとして，差別意識の遺存があげられる。

４．差別的意味を持たない事象［kurisutʃaɴ］の隆盛

長崎県域を除く地域では古くから［kurisutʃaɴ］類が使用されていた（地図 1）。他方，長崎県域では新しい事象として認識されていた[10]（地図 2,3）。長崎県域において［kurisutʃaɴ］類の分布域が拡大した要因として，［kurisutʃaɴ］類が新しい事象として認識されたことが挙げられる。

ところで，［kurisutʃaɴ］という事象に対し，長崎県域の 2 人及び福岡県域の 1 人の被調査者は，次のように説明した。

被調査者 31「上品な言葉が「カトリック」「クリスチャン」。」

被調査者 109「「クリスチャン」は最近の言い方。可愛らしい言い方。」

被調査者 153「「クリスチャン」というと，モダンでおしゃれな感じ。優しい人，拓けた人，上流階級というイメージがある。」

［kurisutʃaɴ］類がよいイメージを持った事象として認識されていることを読み取ることができる。

以上のことから，長崎県域において，［kiriʃitaɴ］類や蔑称語などの差別的事象が使用されなくなり，［kurisutʃaɴ］類・［katorikku］類・［ʃin ɕ a］類の使用が拡がった（地図 2,3）要因として，前者が古い事象，後者が新しい事象とみなされたことに加え，後者がよいイメージを持った事象として認識されたことが指摘できる。さらに，キリスト教・キリスト教徒に対する差別・差別意識の薄れ（地図 5）が，［kiriʃitaɴ］類の衰退と同様に［kurisutʃaɴ］類の隆盛にも影響しているものと解釈される。

Ⅴ．まとめ

以上の考察から，Christão の受容史は次のようにまとめることができる。

中世末期に九州地方で受容された［kiriʃitaɴ］は，禁教政策・宗教対立等の歴史的経緯から，差別的意味を持つようになった。また明治以降，長崎県域においてキリスト教徒に対する差別意識から［gedo:］［a:meɴ］などの様々な蔑称語が使用された。［kiriʃitaɴ］はそれらの蔑称語とともに使用され続けた。しかし，差別意識の薄れとともに，差別的意味を持った［kiriʃitaɴ］［gedo:］［a:meɴ］などの事象は廃され，差別的意味を持たない［kurisutʃaɴ］［katorikku］などの事象が使用されるようになったものと解釈される。

Ⅵ．おわりに

本稿では，九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Christão の受容史について，特に方言事象分布とカトリック教会の分布及びキリスト教・キリスト教徒に対する意識との関係を明らかにすることをとおして考察を行った。

本稿は，宗教を差別する意識が方言の使用に影響を

与えた[*11]ことを指摘する言語地図解釈研究の試みである。

【注】

*1 ラテン語，ポルトガル語またはスペイン語などが出自であり，中世末期以降に日本へ伝えられたと考えられるキリスト教の教義・信仰そのものに関わる外来語彙。中世末期に出版されたキリシタン資料などの歴史的文献資料に用例のあるもの。筆者による定義。

*2 (1)調査期間：2003 年 8 月~2005 年 11 月 (2)対象被調査者：外住歴 3 年以内，女性，老年層（調査時 60 歳以上）〈原則〉 (3)調査方法：統一調査票による質問調査，実地調査 (4)県別調査地点数：福岡 16，佐賀 20，長崎 162，熊本 33，大分 20，宮崎 20，鹿児島 29 (5)調査者：小川俊輔

*3 民俗学の領域では，各都道府県ごとに宗教や民俗に関する分布地図が作られてきている。しかし，それらは民俗学の研究対象としてのみ扱われてきており，方言との関係で捉えるという視点が見られなかった。しかも,この民俗地図には，日本の伝統的な宗教の項目が扱われるだけで，キリスト教やイスラム教などに関する項目は対象外に置かれていた。

*4 紙幅の関係上，言語地図上の全事象を考察の対象とすることができない。本稿では，分布地点数の多い事象から優先的に取り上げることとした。

*5 天草学林刊のローマ字本。本稿では，橋本（1961）の翻刻によった。

*6 『日本国語大辞典』（2000-2002）によれば，「クリスチャン」という事象が初めて文献に表れるのは，1888 年『藪の鶯』（三宅花圃）である。このことからも，［kurisutʃaɴ］が明治期以降の事象であることは確からしいと思われる。しかし，その語源が英語であるかについてはさらなる調査が必要である。

*7 豊臣秀吉による伴天連追放令の発布は 1587 年。徳川幕府による禁教令の発布は 1614 年。

*8 蔑称語相互の歴史的先後関係に関する考察は今後の課題である。

*9 差別意識が薄れた理由は様々に考えられる。その 1 つとして，信教の自由を保障する大日本帝国憲法（1889 年公布，1890 年施行）第 2 章第 28 条及び日本国憲法（1946 年公布，1947 年施行）第 3 章第 20 条の影響があったと考えている。

*10 キリスト教信者同士での呼称とキリスト教信者でない人のキリスト教信者に対する呼称との関係については，稿を改めて考察する必要がある。本稿で取り上げた蔑称語はほとんどの場合，キリスト教信者でない被調査者から得られた回答であった。被調査者がカトリック信者である場合，たいてい［katorikku］類・［ʃiɴɕa］類が回答されたのであるが，例外もあった。例えば，［kiriʃitaɴ］類は複数のカトリック信者である被調査者からも回答された。また 1 人のカトリック信者である被調査者からは［a:meɴ］が回答されている。他にも，カトリック信者である複数の被調査者から，「［kurisutʃaɴ］はプロテスタントの信者をさす言い方で，カトリック信者のことをささない」旨の説明を受けた。これは，九州全域において，カトリック信者もプロテスタント信者も併せて［kurisutʃaɴ］と呼称しているのとは異なった使用法であり，注目される。

*11 従来の言語地図解釈研究や社会言語学で問題にされてきた「意識」は，語形に対する新古の意識や，共通語的事象・方言的事象に対する好悪の意識，あるいは方言境界の意識などであった。本稿では，ある特定の宗教・信者に対する意識や，ある語形が差別的意味を持つかどうかについての意識を問題にしており，従来言われてきた「意識」とは異なっている。

【主要参考文献】

Ogawa, Shunsuke（2006.4）「A Geolinguistic Study on the History of Acceptance of the Christian Vocabulary in the Northwestern Area of the Kyushu District of Japan」Astrid Van Nahl（編）『Dialectologia et Geolinguistica 13/2005』pp.108-123，Mouton de Gruyter

Viereck, Wolfgang（2006.11）「Chasing Butterflies: Why is a Butterfly called ‘Butterfly’」Oebel, Guido（編）『Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studi a Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblata』Lincom Europa

姉崎正治（1925.2）『切支丹宗門の迫害と潜伏』同文館

楳垣實（1943.7）『日本外来語の研究』pp.66-75，青年通信社出版部

浦川和三郎（1927-1928）『切支丹の復活 前篇・後篇』日本カトリック刊行会

江端義夫（2002.3）「方言文明史観」広島大学教育学部国語科光葉会（編）『国語教育研究』45，pp.32-42

江端義夫（2006.11）「地理言語学の精神」Oebel, Guido（編）『Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblata』Lincom Europa

海老沢有道他（編）（1993.11）『キリシタン教理書』教文館

大橋勝男（1974.5-1976.10）『関東地方域方言事象分布地図』1~3，桜楓社

大橋勝男（1989.2-1992.2）『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』1~4，桜楓社
小川俊輔（2006.5）「九州地方におけるキリシタン語彙 contas 及び rosario の受容史についての地理言語学的研究」日本語学会（編）『日本語学会 2006 年度春季大会予稿集』pp.93-100
国立国語研究所（編）（1966-1974.3）『日本言語地図』1~6，大蔵省印刷局
国立国語研究所（編）（1989.6-2006.3）『方言文法全国地図』1~6，大蔵省（→財務省）印刷局
柴田武（1969.8）『言語地理学の方法』筑摩書房
柴田武（1988-1995.7）『糸魚川言語地図』上・中・下，秋山書店
土井忠生（1933.7）「日本耶蘇会の用語に就いて」楳垣實（編）『外来語研究』3，pp.7-22，平野書店
日本国語大辞典第二版編集委員会他（編）（2000.12-2002.12）『日本国語大辞典（第二版）』小学館
橋本進吉（1961.3）『キリシタン教義の研究』岩波書店
藤原与一（1976.2）『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』東京大学出版会
廣戸惇（1965.7）『中国地方五県言語地図』風間書房
宮崎賢太郎（1996.11）『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会
米村竜治（1998.11）「隠れキリシタンと隠れ念仏」山折哲雄他（編）『日本人はキリスト教をどのように受容したか』pp.121-136，国際日本文化研究センター
和気清一（編）（1948.9）『キリスト教年鑑』pp.268-278，キリスト新聞社

付記

本稿は，広島大学大学院教育学研究科の江端義夫教授，佐々木勇助教授，竹村信治教授，沼本克明教授，町博光教授にご指導いただいて成ったものである。記して感謝申し上げる。